

## 秦の墓制とその起源

黄 暁 芬

【要約】 中国史上、最初の統一帝国となった秦については、都城や王陵などその壮大な文化様相はかなり明らかになってきたが、秦人自身の発生・発展・消滅の過程については、まだ解明されていない。本稿はそれを墓制から考察したものである。はじめに春秋戦国期の典型的な秦人墓を三つの側面から明らかにした。すなわち、副葬品、墓制の階層的構成、そして埋葬方式、とくにその屈葬形態である。これらを時間的に整理してみると、秦に独自の墓制は春秋時代にもっとも強く現れていたが、戦国早期から中期にかけて急速に薄れ、中原化していくことが判明した。次にこの独自の墓制をより広い視野から眺めてみた結果、伸展葬を伝統的に採用していた中原の墓制とは対照的に、屈葬を伝統的に続けていた甘肅東部地域の墓制にその起源が求められることがわかった。とくに、西周時代にさかのぼる甘肅毛冢坪遺跡の文化様相は秦文化の直接の祖形と言えるものである。そして春秋戦国期における中原地域や周辺地域への秦の墓制の一時的な広がりは、秦が東遷してきた証左と言える。しかし、いったん強い影響を周囲に与えた秦人墓制は、天下統一へ向かう戦国後期から秦代にかけて、急速に弱まっていき、ついには失われる。これは帝国形成途上、墓制においても統一化を目指した秦の積極的な意図によるのである。

史林 七四卷六号 一九九一年一月

### 一 はじめに

秦王朝は中国で最初の統一国家であり、中国古代史上重要な変革の時期と認められている。しかし、秦帝国は最も短命の王朝であるため、従来、文献史料と考古資料に乏しく、秦文化には不明な部分が多かった。それでも、一九七〇年代以降、秦文化の精髓とも言える秦雍城の宮殿祭祀建築群、秦公王陵及び大量の中・小型秦人墓の検出、さらに、広大な咸

陽宮や始皇帝陵や兵馬備など考古学上の重大な発見が相つぎ、秦文化の様相も徐々に明らかになってきている。こうした考古学上の重大な成果は春秋戦国期から統一期にかけて発展を遂げた秦国の社会生産力の強さを示すものであって、これが東方六国を滅亡させ、天下統一を実現した原動力であったと言える。しかし、強大であったこの秦帝国も、統一後わずか一五年の短命な王朝として、様々な秦文化の謎を残しながら歴史の表舞台から消えてしまう。

秦文化の壮大さについてはかなり明らかになってきたが、秦人自身の文化の発生・発展・消滅の過程については、ほとんど解明されないまま今日に至っている。本稿では古代社会における墓制のもつ保守性と継承性に着目し、この問題について考えてみることにする。

はじめに、秦人墓の研究史について簡単に振り返っておきたい。

一九四〇年代において高去尋氏は、河南安陽大司空村南墓地の発掘調査を行った際、特殊な埋葬法——屈葬の存在に気がついた。すなわち大司空村における第二期古墓群中、人骨がよく残っていた一二基のうち、屈葬が九基で、伝統的な伸葬は三基しか認められなかったのである。これに基づいて、氏は中原地域において、ある時期に屈葬の比率がきわめて高くなることを初めて指摘した<sup>①</sup>。そして、高氏は大司空村・河南輝県琉璃閣・山東歷城城子崖にある屈葬墓を副葬品によって検証し、戦国時代において黄河下流域では伸葬と屈葬が並行して存在していたことを明らかにした。しかしながら当時はまだ資料不足であったため、屈葬の認識については、スキタイや南ロシアあたりの影響ではないかと推察するにとどまっておき、秦人との関係については一切言及していない。

一九五七年には湖南長沙左家塘で調査された一基の土壙墓から秦代の紀年銘をもつ一点の銅戈が発見され、戦国末々秦王朝初期の秦人墓の様相が初めて判明した<sup>②</sup>。その後、陝西宝鶏鳳閣嶺の洞室墓から「秦の始皇帝」廿六年」銘をもつ銅戈<sup>③</sup>が出土し、陝西臨潼上焦村では秦の始皇帝陵の脇にある宗室陪葬墓が調査された<sup>④</sup>。さらに、湖北雲夢睡虎地で大量の秦代竹簡を伴出した秦人墓が発掘されるというように、秦人墓及び副葬品の認識は徐々に固まってきた。

一九六〇年代以後、陝西鳳翔にある春秋戦国期の雍城遺跡における継続的な調査が始まり、秦公王陵とともに、その周囲から計六百基以上の中小型秦人墓が発掘調査された。これによって秦人独自の副葬青銅器や副葬陶器の変遷過程の把握が可能となり、屈葬が秦人の特有の葬制であることが確実になった。このような蓄積の上に、一九八〇年代以後、研究の深化が見られたのである。韓偉氏は陝西地区の秦人墓副葬品の編年に基づいて、春秋・戦国期における陝西地区秦人墓の時期区分を行った<sup>④</sup>。さらに、陝西関中地区の秦人墓から出土した青銅容器の編年を組み立てた陳平氏の精力的な研究があり、また葉小燕氏は陝西地区の秦人墓資料をまとめ、他地域の資料をも含めた秦文化の特徴及び編年の概要を発表した<sup>⑤</sup>。

こうして秦人墓の特徴がしだいに明らかにになり、その後も秦人墓が各地でみいだされるようになったが、いまだ、それらは時間的にも地域的にも点的な把握にとどまり、とくにその起源や広がりについての体系的整理はなされていない。本稿は秦人墓制の特徴を再検討し、それを時間的に整理することを第一とする。そして、こうして明らかにした一つの特色ある墓制の消長を、空間の中で捉え直してみることによって、秦文化の起源に対するひとつの考古学的解答を試みたい。これは同時に、統一帝国を築き上げていく過程での秦文化のあり方を歴史的にとらえることでもある。

- ① 高去尋「黄河下游的屈葬問題」『中国考古学報』第二册、国立中央研究院歴史語言研究所專刊之十三、一九四七年三月
- ② 湖南省文物管理委员会「長沙左家塘秦代木槨墓清理簡報」『考古』一九五九年第九期
- ③ 王紅武・吳大猷「陝西省寶鷄鳳閣嶺公社出土一批秦代文物」『文物』一九八〇年第九期
- ④ 秦俑考古隊「上焦村秦墓清理簡報」『考古与文物』一九八〇年第二期
- ⑤ 雲夢睡虎地秦墓報告編寫組「雲夢睡虎地秦墓」文物出版社、一九八一年九月
- ⑥ 韓偉「略論陝西春秋戰國秦墓」『考古与文物』一九八一年第一期
- ⑦ 陳平「試論関中秦墓青銅器的分期問題（上、下）」『考古与文物』一九八四年第三・四期
- ⑧ 葉小燕「秦墓初探」『考古』一九八二年第一期

## 二 春秋戦国期の秦人墓制

一つの人間集団の墓制を追究するのならば、まずその集団に固有な埋葬の標識をみつける必要がある。そのためには、

秦文化の中核地域であった陝西地区の春秋戦国期秦人墓を例にとることがもつとも有効である。

## 1 秦人墓副葬品の編年

秦人墓の代表的な副葬品としての青銅器・陶器の型式編年については、諸先学の精力的な発掘調査と検討によってかなり明らかにされている。<sup>①</sup>ここで、後に論ずる秦人墓制の年代決定のためにも、それらの研究成果を総合的に整理しておきたい。

### ① 副葬青銅器(図1)

秦人墓から出土する青銅器は、陳平氏の研究成果に従えば、春秋型と戦国型に明瞭に分けて認識することができる。

#### 春秋型副葬青銅器へ春秋型Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ期

秦の青銅器の春秋型は春秋早期から独自の発展・成熟・定形化を経て、戦国早中期の交まで流行する。器種構成は基本的に西周以来の伝統形式——鼎・簋・壺・盤・匜の組合せを見せながら、秦独特の風格(主に型式と文様)を加味したものである。その形態は全体として小さくなる傾向があり、その典型器種の型式変化を示せば、次のようになる。

鼎(1・5・9) すべて無蓋。全体として重厚なものから、薄手なものへと変化していく。また、口縁部の直立する

耳は矮小化し、獸足は太くて短いものから細くて高いものへ変わる。

簋(2・6・10) 春秋型にのみ存在し、蓋部は匙面のある丸みの強いものから匙面の消失に伴い平たいものへ変わる。

腹部が徐々に浅くなり、双獸耳が横向きに伸びる。脚部は高くなる。

甗(3・7・11) 甗と鬲とが分離鑄造であったものから一体鑄造になり、鬲部の耳が失われる。甗部の耳は直立した

口縁の唇部に取り付けられるようになる。小型化が進むとともに細身になり、鬲部の丸味は失われ高脚化する。

壺(4・8・12) 春秋型には断面方形の壺しか存在しない。蓋は大型になり、蓋の中部のくびれはきつくなる。また

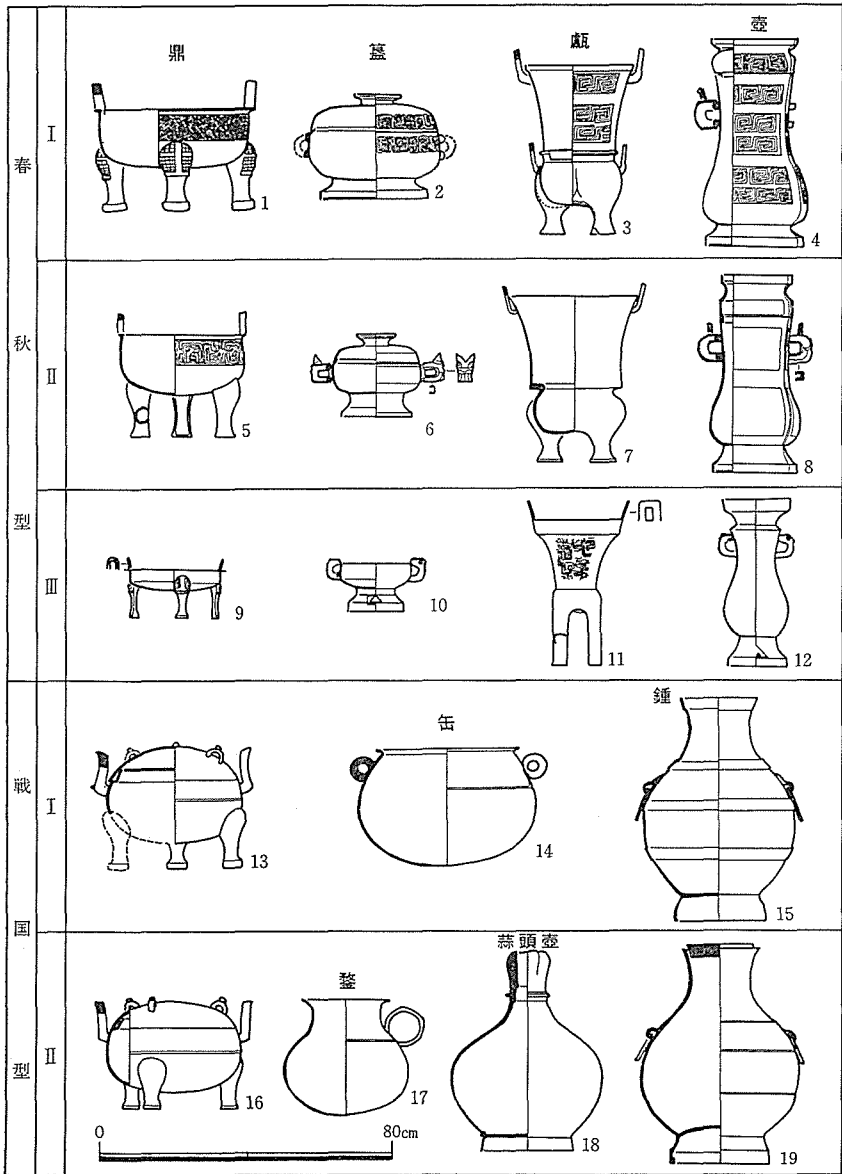


図1 秦人墓の副葬青銅器の編年

- 1—4 宝鵝福臨堡M1 5 隴鼎辺家荘M5 6・8 秦家溝M1 7 鳳翔八旗屯BM27  
 9・11 豊西客省荘M202 10・12 鳳翔高荘M49 13—15 大荔朝邑M203  
 16 鳳翔高荘M16 17—19 鳳翔高荘野狐溝M1

壺部は下ぶくれの器形をもつが、最大幅の位置は徐々に上昇し、全体として細身になり、脚が高くなる。双耳は腰部から口縁下へ移り、獸頭状耳は半環形耳に変化する。

これら秦人の春秋型銅器は春秋後期には明器に転換し、さらに形骸化の過程をたどって戦国中期にかけてしだいに消滅していく。

#### 戦国型副葬青銅器（戦国型Ⅰ・Ⅱ期）

秦人青銅器の戦国型は春秋型とは全く違った器種構成を持ち、戦国中期から中原地域の青銅器をそのまま模範とし、しだいに発展、完成させたものである。春秋型の典型とした直立した耳をもつ無蓋の鼎、高脚でやや直腹の簋、甗と鬲とが分離製造の方甗、高脚で大型蓋の方壺は徹底的に消失し、代わりに扁球形の鼎（三鈕付隆起蓋、耳付鼓形腹）、方壺（鋤と呼ぶ）、円壺（鍾と呼ぶ）、円甗（釜と甗とが分離製造）、小口釜、蒜頭壺などが主流となる。これらの一群は急速に出現し、流行し、型式変化をあまり見せず、秦漢まで続く。その典型器種を示せば次のようになる。

鼎（13・16） 終始短足、三鈕付の隆起状態を有し、双耳付の扁球形を呈する。

甗 大体において、上の甗部と下の釜部から構成されている。また、戦国晩期～秦代には、双環耳ないし単環耳が肩に付く小口釜Ⅱ「釜」（17）が新たに流行した。

壺 中原文化様式に属する鋤、鍾（15・19）及び秦式蒜頭壺（18）、蒜頭扁壺（中原式扁壺と秦式蒜頭壺の複合した新型式）である。

このように秦人青銅器の春秋型と戦国型の間には連続性がなく、戦国早期から中期にかけて、様式上の交替現象が指摘できるのである。こういう文化上の急速な交替は当時の社会に大きな変動が起ったことを反映している。それは、秦国が統一帝国に向かう過程で、秦的な青銅器を形骸化させる一方、中原地域における爛熟した青銅器文化を意欲的に直接導入したことを示している。

② 副葬陶器 (図2)

春秋戦国期における秦人の副葬陶器を分析してみると、陳平氏が青銅器に対して春秋型と戦国型に分けた認識が陶器についても適用できることがわかる。

春秋型副葬陶器

秦人陶器の春秋型は春秋早期から青銅礼器を模倣した特有の陶製礼器様式〈鼎(1・8・14)、簋(2・9)、甗(4・6・12・16)、壺(10・15・19)、無蓋豆〉を主流とする一方、伝統的な日常陶器の組合せ〈鬲(7・13・17)、盆、罐あるいは大口罐(3・5・11・20)〉も西周時代以来まだ続けて持っている。これに対して、該期の秦国以外の地域の副葬陶器は青銅礼器を模倣したものが全く見られず、その器種構成は在来陶器の様式〈鬲、盆・豆・罐〉を守っている。秦が倣銅陶製礼器を中小型墓で普遍的に副葬していることは異例なのである。

元来、青銅礼器を持つことは、その社会における地位と身分の象徴として意味を持ち、それに少しでも反することができないほど中原地域において伝統的な礼制は固く守られていた。そのため、陶器で青銅礼器を模倣することなどは戦国時期まで許されなかったのである。それなのに、春秋早期以降、秦国において陶製礼器が既に量的に存在していたことは、中原諸国と違って、秦人社会の礼制の基盤が初めから弛緩していたことを物語ると同時に、それをひとつの地域的特色ともみなせるのである。なお春秋型の陶製礼器はときに彩色を施すものがあることが特徴で、装飾性において発達を遂げている。秦人の春秋型陶製礼器における型式変遷は基本的に秦人の春秋型青銅器と一致している。そして戦国早期になると、器形が形骸化し、戦国中期までにはほぼ消失してしまうのである。

戦国型副葬陶器

秦人陶器の戦国型は、戦国期に入り中原地域で新たに確立した倣銅陶製礼器〈鼎(22・27)、鍾(24)、蒜頭壺(28)〉(春秋型倣銅陶製礼器と別系譜のもの)と、日常容器〈缶(21・26)、甗・盆(18・23)、罐(25・29)など〉の組合せをそのまま

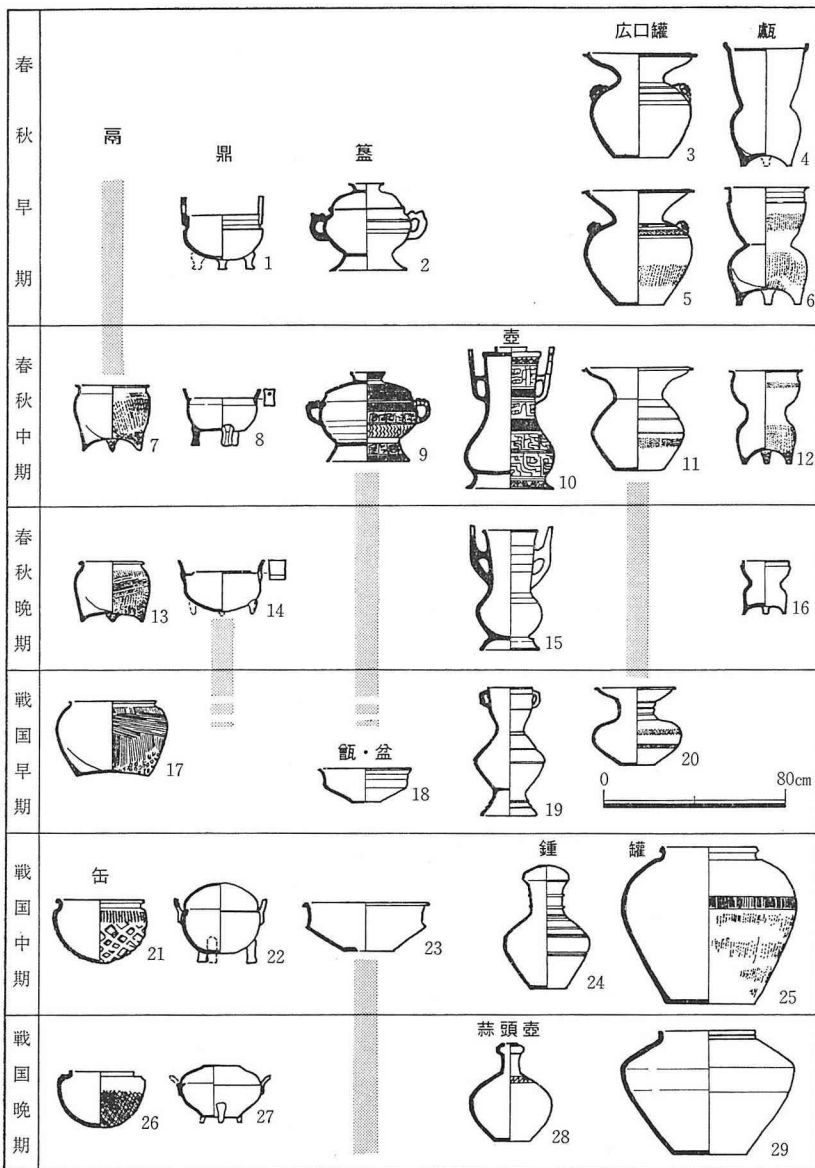


図2 秦人墓の副葬陶器の編年

1—4 西高泉村M3 5・6 同M2 7—9 高荘M12 10 同M10 11・12 茹家荘M6 13・15  
 ・16 馬家荘T93K3 14 高荘M24 17—20 八旗屯MC9 21 半坡M9 22・24 八旗屯  
 MB29 23 朝邑M107 25 廟荘M7 26・27 上焦村M11 28 同M12 29 同M18



導入したものである。この春秋型から戦国型への移行は戦国中期において完成する。戦国晩期初頭には、大型の甕を主体とする日常陶器の割合が著しく高くなり、秦の地で春秋晩期において既に成立していた竈・倉などの明器も増加する。

このように秦人の副葬陶器の移り変わりも副葬青銅器のそれと対比できるのである。つまり、春秋型から戦国型への移行時期は一致しており、現象的にはともに同じ中原地域文化の波を被ったと見られるのである。ただし、陶器の場合は礼制的な青銅器より地域ごとの定着性が強く、文化上の交替は緩やかに行われたようである。

以上見たように、副葬品の変化には、戦国早期から中期にかけて秦文化が重大な転換期を迎えたことが示されている。つまり、秦は最初、春秋期には中原諸国の礼制を強く志向しながらも、独自の地域色を力強く見せていた。それが当時の大変革期における諸文化の衝突と融合を経て、戦国中期以降、濃厚な秦文化の要素が徐々に失われていき、ついに中原文化に合流したと言える。これは中国全体が統一的気運をもって胎動していたことを反映しているのであろう。

## 2 春秋戦国期の秦人墓制の階層性

いま見たように、周王朝から封じられて立国した秦人は独自の地域色を持ちながら、周文化に代表される中原文化の相を、特に礼の踏襲を志向していたらしい。中原文化の礼制に関して、『管子』「立政」には、「度爵而制服、量禄而用財。……修生時尙軒冕、服位、谷禄、田室之分、死時則有棺槨、絞衾、壙壟之度」とあり、『礼記』「曲礼」には、「無田禄者不設祭器」とある。また礼器のもつ数に関しては『公羊傳』「桓公二年」の何休注に、「礼祭天子九鼎、諸侯七、卿大夫五、元士三也」とある。すなわち、中原の伝統礼制によると墓の規模の大小、副葬品の種類や数量などは、被葬者生前の爵禄に規制されていたのである。これまでの殷周時代の墓の考古学的調査からそこに中原地域の礼制が確実に存在していることが検証されており、それを参照すると春秋戦国時代における秦人墓制に以下のような階層性をみいだすことができる。

秦雍城の城外西南側では大規模な秦公陵园及び一般貴族の中・小型墓が多数発見されている。また、一九八六年陝西臨

瀋陽山西麓の坂原には、東遷した戦国晩期の秦公東陵(秦の芷陽県に所在するので、芷陵とも呼ぶ)が発見された<sup>③</sup>。こうした調査成果に基づき、秦人墓は構造や副葬品などによって以下の四種の類型に大別される。これらは被葬者の階層と対応する。

## 大 型 墓

広大な陵園をもち、全長二二〇m～三〇〇mで、「亜」字形・「中」字形墓が目だっている。また「甲」字形・「凸」字形・「目」字形墓も見られ、多数の礼器を副葬し、殉人・犠牲・車馬殉葬などを伴う。今まで唯一発掘調査された秦公一号大墓を例にとってみる。

墓は主軸を東西方向に向け、平面形は「中」字形を呈する。面積五三三四<sup>m</sup>である。全長三〇〇mで、東墓道長一五六・一m、西墓道長八四・五mを計る。墓室は長方形で東西五九・四m、南北三八・四五～三八・八m、深さ二四mである。周りを粘土版築や木炭で詰める。柏木製の棺槨構造は主室(墓室中央一四・四×五・六×五・六m)と副室(主室の西南側六・三×四・九×二・六m)に分けられ、その間に通過小門がある。木槨は断面の一边が二二cmの角材を積み重ね、側壁・底・蓋を組立てる構造となっている。

繰り返し盗掘されたため、墓室中には人骨が残らず、副葬品などの状態は不明である。だが、墓室のまわりに木槨に入られた一六六人の殉葬者や埋土中から検出された祭祀(?)人骨二〇体がある。殉葬者の人骨はすべて屈葬であった<sup>④</sup>。

この類型は最大級の規模をもち、また陵園の配置や殉葬者の膨大な数字から見て、秦公陵墓に所属することは間違いない。

## 中 型 墓

五鼎墓(鼎を五つ排列して副葬した墓)が特徴である。陝西戸県宋村秦墓M3<sup>⑤</sup>、龍県辺家村M1<sup>⑥</sup>を代表とする。長方形堅穴式墓で、主軸は東西方向を向く。面積二四<sup>m</sup>前後で、木棺槨構造をもち、羊犬の犠牲・殉人・車馬坑がある。礼器のセツ

トは供馱器（鼎）・盛食器（簋）・酒器（壺）・盥洗器（盤、匜）から構成されるが、基本的な組合せは鼎・簋・壺であり、その青銅礼器の組合せには鼎5、簋4、壺2、瓶1、盤1、匜1の規制が見られ、それは西周の列鼎制度と一致する。

こうした類型の墓の被葬者は、列鼎制度や墓の構造及び副葬品の構成より、中級官吏層であったと推測される。

### 中小型墓

三鼎墓で、青銅製ないし陶製の鼎を三点副葬するのが特徴である。長方形竪穴式墓と洞室墓とがあり、面積は8㎡前後（青銅礼器をもつ）と5㎡ぐらい（陶製礼器をもつ）のものがある。木棺槨をもち、羊犬の犠牲、殉人や車馬坑がある。被葬者は人骨の残っている限り、屈葬が絶対的に多数を占め、頭位は西ないし西北向きである。青銅礼器の器種の組合せは基本的に鼎・簋・壺・瓶（鳳翔八旗屯C M 2）で、陶製礼器の組合せには鼎・簋・壺（鳳翔八旗屯B M 11）がある。<sup>⑦</sup>

この類型の三鼎墓は中型墓との対照から、その被葬者を中下級官吏層に相当させることができる。

### 小型墓

面積は3㎡前後で、二種類に分けられる。

①類：青銅、陶製の二鼎或いは一鼎墓。二鼎墓の形態や礼器の器種及びその組合せなどは三鼎墓と一致するが、一鼎墓にある礼器の組合せは決まっていない。木棺槨構成が普通だが、重棺も存在する。被葬者は屈葬が多く、頭位は西向きを主とする。殉人や羊犬犠牲が少数あり、車馬坑の代わりに車馬具を副葬し、陶製明器の倉や車、陶人・陶馬が登場する（鳳翔高莊M 10、M 12など）。この類型の被葬者は下級官吏層に所属すると思われる。<sup>⑧</sup>

②類：検出例が最も多く、木棺をもち、竪穴式墓や洞室墓は規則的に配列され、形態もよく整っている。被葬者は木棺をもち、人骨頭位はほとんど西向きで、屈葬が目だっている。羊犬犠牲（祭肉のみ）もある。副葬品としての陶器は炊器・食器・水器三種の実用器種を主とし、その組合せは鬲・盆・罐と鬲・豆・孟の二群がある。少量の生産用具が出土した例や人骨の頭、肩、足、胸部に銅鏃が射込まれた例（西安半坡戦国墓M 110、M 86）もある。<sup>⑨</sup> ②類墓は副葬品の器種構成などから

戦士か庶民の墓であろうと考えられる。

以上の秦人墓の分類に基づいて、春秋戦国期における秦人墓制のいくつかの様相をまとめておきたい。

(1) 秦公陵墓の構造や配置などはまさしく殷代王陵を写したものである。ただし、秦公一号大墓の面積は五三三四㎡で、殷代王陵の最大面積は一八〇三・五㎡(4127)である。つまり、春秋晩期の秦公大墓は商代王陵より三倍ほど大きくなっている。

(2) 雍城期(春秋中期)戦国早期)における十九代の秦公は依然として、「中」字形墓という諸侯王級の規制を守っている。だが、戦国晩期、東遷した後の秦公東陵になると、すでに「亜」字形墓いわゆる天子級の墓に変わっている。先秦時期における最大規模の陵墓を持った秦公の力が天子と肩を並べるまでに強くなったことを窺うことができる。

(3) 中級官吏以上の墓の構造や殉人・車馬坑及び副葬品の器種構成などを見ると秦人の支配者階級は殷周以来の礼制を懸念に継承していたとすることができる。ただ型式や装飾文様には秦文化の独自の要素が読み取れる。そして、その墓制における独自の要素は、中小型墓のあり方に一層多く認められる。それは、低い階層の墓制ほど地域性が現れやすいからである。

すでに考察したように、秦人の大型墓と中型墓は中原の殷周墓制を志向しているが、しかし、目下それらの発掘調査は少なく、資料の制限があるのが実状である。したがって上記の諸類型すべてにわたる具体的な様相を同列に検討することは不可能である。一方、秦文化の中核地域に所在する陝西地区の中小型と小型墓は調査例が多く、それらにはもっとも秦人的な墓制の特徴が垣間みられると考えられるので、次節以下は主にそれらの調査資料を取り上げて検討していくことにする。

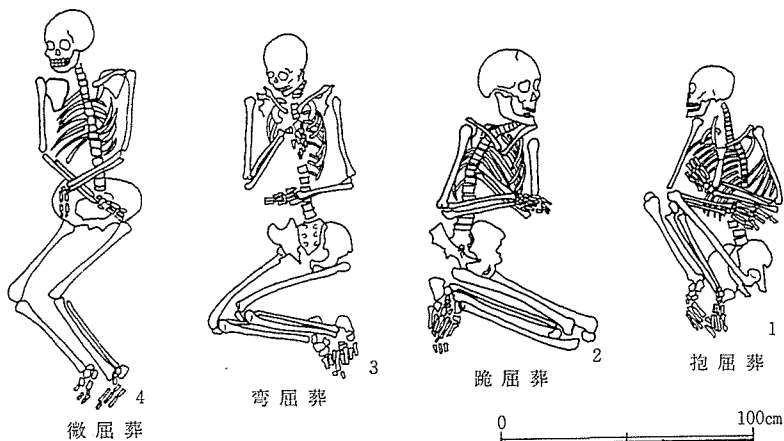


図3 秦人屈葬の四形式

1 半坡遺跡M13 2 同M7 3 同M16 4 洛陽中州路M513

### 3 秦人墓を特徴づける埋葬方式

筆者の統計によると、これまで秦雍城を初めとして陝西関中地区で検出された春秋戦国期の秦人墓中、すでに発表された資料は五七二墓にも及ぶ。そのうちわけは、人骨が残らず、状態不明のものが一〇〇墓で、総数の一八％、伸展葬が六一墓で、総数の一一％なのに対して、屈葬は四一一墓あり、総数の七一％を占めている。とくに、人骨の埋葬方式の明確な四七二墓のうち、屈葬は四一一墓に達し、八六％を占め圧倒的に多い。この統計結果は屈葬が秦人の埋葬思想の、もっとも大きな特徴であることを示している。

ところで、こういう秦人墓に特有な屈葬の形式には多様なものがあり、報告書の名称も統一されていなかったもので、検討に先だって屈葬の形式分類をしておきたい。秦人の屈葬は意識的なものであり、人体の両腕・両足を一定の形状に曲げて固定する。その人骨の両腕・両足の位置によって、四つの形式に分けることができる（図3）。

抱屈葬：両手で両膝を胸に抱きかかえる形状。それにつれて、背中も大きく丸めた形になる（1）。

跪屈葬：足の大腿骨と脛骨の角度を三〇度前後として、ちょうど人間のひざまずいた形状になる。背中はすでにまっすぐに伸び、両腕は胸の前に組んだ状態になる（2）。

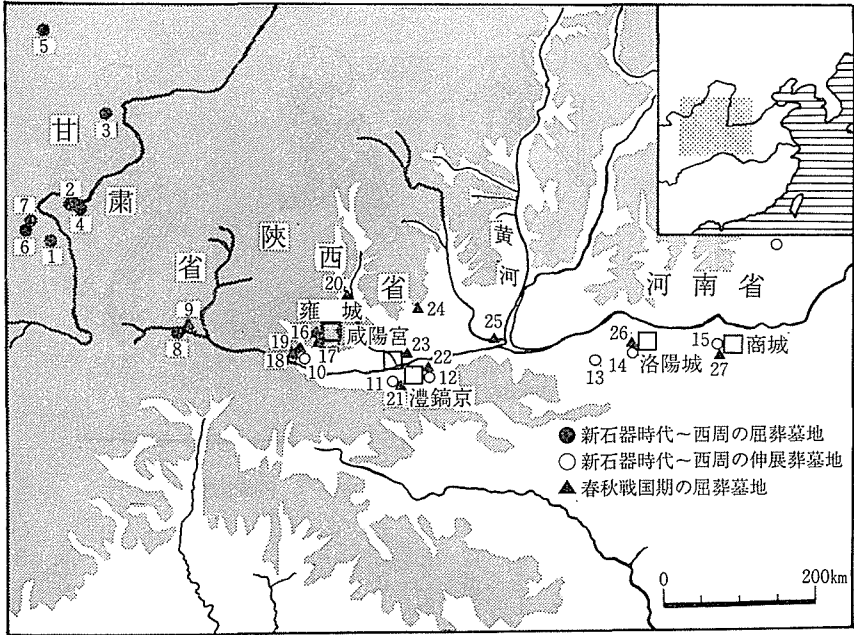


図4 関連遺跡地図

- |             |             |            |             |
|-------------|-------------|------------|-------------|
| 1 甘肅広河渠地巴坪  | 2 蘭州七里河花築子  | 3 甘肅景泰張家台  | 4 蘭州紅谷区土谷台  |
| 5 甘肅武威皇娘々台  | 6 甘肅永靖秦魏家   | 7 甘肅永靖姻家川  | 8・9 甘肅甘谷毛家坪 |
| 10 宝鷄北首嶺    | 11・21 長安張家坡 | 12・22 西安半坡 | 13 河南陝鼎廟底溝  |
| 14・26 洛陽中州路 | 15・27 鄭州二里崗 | 16 陝西鳳翔八旗屯 | 17 陝西鳳翔高庄   |
| 18 宝鷄福臨堡    | 19 宝鷄李家崖    | 20 陝西長武上孟村 | 21 陝西長安客省庄  |
| 23 咸陽黃家溝    | 24 陝西銅川棗廟   | 25 陝西大荔朝邑  |             |

彎屈葬：足の大腿骨と脛骨の角度を六〇度〜九〇度に曲げた形状。両腕はやや下がつて上腹部付近で組んだ格好になる(3)。  
 微屈葬：足の大腿骨と脛骨の角度を一二〇度前後とした形状。両腕は下腹部の前で交差する(4)。  
 それでは、屈葬を顕著な特色とする秦人の墓制が、ほかにどのような特色をもち、そしてそれらが時代の経過にともないどのように現れ、あるいは消えていくのか、まず陝西地域における代表的な秦人墓の発掘調査資料を取り上げ、副葬青銅器・陶器の型式編年に基づいて、春秋戦国期の秦人墓制の変遷を調べてみよう(図4)。その際、特に埋葬方式を重視する。  
 ① 陝西宝鷄福臨堡秦人墓一〇基<sup>10</sup>  
 この墓地における副葬品の器種構成は、青銅器では秦人の春秋型青銅礼器が中心となる。たとえば、一号墓(M1、以下同様に

略記する。）では鼎3・簋2・甗1・方壺2の組合せが見られる。一方、陶器は秦人の春秋型做銅礼器を中心とする。例えばM3では鼎3・簋2・甗1・方壺2の組合せとなっている。鼎は、深めで、獸足が太く短かいもので、甗が甗と鬲との分離鑄造になっていることなどは、いずれも春秋型前半段階の典型であることを示す。

埋葬施設は主軸が東西方向、西頭位であり、すべて長方形竪穴式の木棺槨墓である。石圭を副葬し、犬の犠牲がある。埋葬方式は、三基は人骨が残らず不明であるが、あとの七基はすべて屈葬で、とくに抱屈葬と跪屈葬が特徴的である。

② 陝西鳳翔八旗屯西溝道秦人墓二六基<sup>①</sup>

この墓地は秦人墓の一括資料の好例である。副葬された青銅器、陶器の器種構成と型式により、二六基の墓は以下の五期に分けられる。

第一期 M8、M16、M18のように、做銅陶製礼器の基本的な組合せが見られ（M8 鼎2・簋2・壺2・豆2・盤1）、秦人陶器の春秋型に属する。ただし鼎3、簋2、甗1、方壺2という在来の礼器数の規制は崩れていく傾向が指摘できる。また法量が小型化するが、該期の新器種として陶函（食糧貯蔵倉の明器）が加わる。年代は春秋晩期に位置づけられる。

第二期 M3、M5、M9、M13、M17、M26、M27のように、秦人青銅器の春秋型がさらに明器化する一方、簋・甗の器形は消失している。戦国型の做銅陶製礼器の鼎・豆・壺の組合せが認められ、生活用陶器の鬲・盆・罐の組合せもある。陶函が相伴している。年代は戦国早期に当たる。

第三期 M12、M14、M15、M20、M25のように、器種構成が簡単になり、做銅陶製礼器に加え、扁球形の耳付鼎や高脚深腹の蓋付豆が特徴的であり、秦人陶器の戦国型中期様式に属する。また、鬲・盆・罐の組合せが見られる。よって年代は戦国中期に相当する。

第四期 M6、M7、M11号墓が代表例で、器種構成は鼎・壺・盆・罐・釜を中心とする。秦人陶器の戦国型晩期の特

表1 八旗屯西溝道出土木棺長  
(総数以外の単位・m)

期	1	2	3	4・5
総数	3	6	5	3
平均値	1.380	1.375	1.632	2.280
最大値	1.48	1.60	2.28	2.68
最小値	1.30	1.05	1.24	1.98

徴を示し、年代は戦国晩期に位置づけられる。

第五期 M2、M10、M19が該当する。日常生活用器の罐・盆・釜を主として副葬する。鉄釜や秦の半両銭が共伴物として出土することから、秦統一帝国時代に位置づけられる。

さて、八旗屯西溝道遺跡には長方形竪穴式墓が二〇基あり、第四期から横穴式洞室墓が登場する。人骨頭位は一基のみ東向きで、あとの二五基はすべて西向きである。いずれも木棺槨をもち、人骨の上には石圭類が散乱した状態でみつっている。もとは棺か槨の上に置いてあったものと思われる。犬の犠牲、車馬の陪葬が見られる。

埋葬方式は七基が盗掘にあい、人骨は攪乱を受けていたが、その他は、伸展葬一基(第五期のM10)を除くと屈葬が一八基を占める。公表されたわずかの図版からは、屈葬四形式のうち抱屈葬と跪屈葬が特徴的であるように見えるが、報告書の記載からは他の報告書同様、これ以上詳しい情報が得にくく、そのため屈葬の形式の分析がなかなか進めにくい。しか

し、小型墓における木棺の大きさを分析することによって、当墓地の屈葬形式の変化のプロセスを把握することができる(表1)。

第一期 木棺の大きさは、M18を例にとってみると、長さ一・三〇×幅〇・七九m前後と短小である。

第二期 第一期の短小型の木棺は引続きあるが、M13のような長さ一・五〇×幅一・一三mの木棺やM26のような長さ一・六〇×幅〇・七六m(該期最長)の木棺も検出されている。

第三期 木棺の大きさがしだいに大きくなる傾向がある。M12の木棺は長さ一・六四×幅〇・八九mで、M15の木棺は長さ一・七×幅〇・七九m(該期最長)である。

第四期 さらに大きくなり、M11のように最長二・六八×幅〇・七九mに達するものもある。



第五期 小型木棺が完全に消失し、M10のような長さ一・九八×幅〇・六四mの木棺やM2のような長さ二・一八×〇・九八mの木棺などが平均的な数値となっている。

この墓地は春秋晩期から秦帝国時代に至る各時期を通じて、秦人の屈葬の圧倒的な強さを誇っている。これは当地が秦人の本拠地に属するということから説明されよう。だが上記の検討の結果、第一期から第五期まで短小型の木棺が徐々に長大化していったことがわかった。木棺の大きさが被葬者の埋葬方式に応じた機能的なものであることから、この木棺の長大化はまさしく屈葬の形式がより屈曲度の弱いものへ、即ち抱屈葬・跪屈葬から穹屈葬・微屈葬、さらに伸展葬へと変わっていったことを明瞭に示しているのである。

③ 陝西銅川棗廟秦人墓二五基<sup>17)</sup>

この墓地の副葬品には、青銅器はなく、日常生活用陶器を中心とする。器種構成は基本的には鬲・盆・釜の組合せを見せるが、M5のような、鼎・盆・豆・甗・壺・壺・広口罐・困の組合せもある。その器形と型式は八旗屯の秦人墓に対比すると、前漢早期に属すると報告されたM25以外、それぞれ春秋晩期～戦国中期にあたることがわかる。ここで特徴的なものは彩色陶人俑と陶製鳥、牛、羊、犬などの明器俑である。埋葬施設は主軸が東西方向を主とし、人骨頭位は西向きが二三基で、絶対多数を占める。木棺槨をもつ、長方形竈穴式墓である。埋葬方式は三基が攪乱のため不明であるが、あとの二二基はすべて屈葬で、典型的な抱屈葬と跪屈葬からなっている。

④ 陝西長武上孟村秦人墓二八基<sup>18)</sup>

一四基の墓は容器を副葬せず、あとの一四基に陶器の副葬が確認された。報告されたM27が唯一青銅器を副葬し、秦人銅器の春秋型晩期に属する鼎1・甗1があった。また陶器は日常生活用の器種の組合せが中心で、秦人陶器の戦国型に属することがわかる。M26では陶鼎1・甗1、簋2・甗1・壺1・豆1（四つの彩色陶器がある）の組合せが認められ、総じて春秋晩期～戦国前期における新旧の典型的な器種の混在を窺うことができ、墓地の年代は春秋晩期から戦国前期頃に位置づ

けられる。

埋葬施設の主軸は東西方向で、人骨頭位は西向きが中心である。すべて木棺槨をもつ長方形竪穴式墓である。石圭の副葬と犬の犠牲がある。埋葬方式は伸展葬が二基あり、あとの二六基は屈葬で、屈葬四形式の中で跪屈葬、彎屈葬が中心となっている。

⑤ 陝西鳳翔高庄秦人墓四六基<sup>④</sup>

出土した副葬青銅器、陶器の器種構成と型式により、四六基の墓は五期に分けられる。

第一期 三鼎墓が存在する。秦人青銅器の春秋型晩期に属する小型、粗製の鼎・壺・甗と陶製礼器の簋・盤・匜・鬲がセットになり、また盆・罐も見られる。秦人陶器の春秋型晩期に属する倣銅陶製礼器はその大部分が彩色され、鼎・簋・壺・豆・盤・匜・甗がある。また陶鬲・銅帶鉤が新しく副葬品に加わる。年代は春秋晩期に位置づけられる。

第二期 第一期の様相を引き継ぐが、春秋型の青銅礼器はさらに小型化し、明器化した。陶製壺の双耳は著しく大きくなり、彩色陶器は減少する。年代は戦国早期にあたる。

第三期 器種構成が単純化し、生活用器が中心となる。基本的な組合せは戦国型の鼎・豆・壺で、鼎・盒・罐・盆の組合せもある。彩色陶器は極めて稀で、日常生活容器の甗と釜が新しく加わる。年代は戦国中期に位置づけられる。

第四期 陶器の器種構成は基本的に秦人陶器の戦国型鼎・壺・盒・罐の組合せになっている。まれに戦国型鼎・鈇があり、半兩銭の副葬も登場する。年代は戦国晩期にあたる。

第五期 基本的には日常生活容器の盆・罐・缶・壺の組合せである。該期の典型的な副葬品としては、陶缶・鉄剣・鉄釜・銅釜・蒜頭壺や銅鼎・鈇・鏡・半兩銭があり、さらに鉄製道具類も増加している。秦の統一帝国時代にあたる。

以上の五期区分に基づき、この墓地の墓制を見てみよう。

埋葬施設の主軸は基本的に東西方向である。人骨頭位は西向きが主で、とくに、第一・二期には西頭位が固く守られて

いたが、その後、第三期のM2、第四期のM39、第五期のM16、M45、M47と北頭位が増加する。

第一・二期は、すべて長方形竪穴式墓である。ところが、第三期に入ると、長方形竪穴式墓（6基）に変わって、洞室墓（9基）が主となる。そして第四・五期にはすべて洞室墓になる。全般的に木棺槨をもち、羊・犬の犠牲や殉葬者もある。

埋葬方式については、一三基は人骨が残らず状況不明であるが、二三基の屈葬と一〇基の伸展葬が認められる。

第一・二期の墓葬はすべて屈葬で、被葬者を納める木棺の大きさは最小のもので長さ一・一×幅〇・五五m（M18）、最大でも長さ一・四五×幅〇・七二m（M48）と短小である。こういう成人用短小型木棺の構造からすると、墓地形成初期には抱屈葬と跪屈葬が特徴的であったことがわかる。

ところが、第三期に入ると、一五基の屈葬墓に加え、伸展葬が二基検出されている。しかも屈葬墓の木棺の大きさは、M9のように長さ一・三×幅〇・六mと最小規模のものも残るが、M40のように長さ一・九×〇・九二と長大化したものも多くなる。八旗屯墓地と同様にここでも木棺の長大化傾向が見られる。これは埋葬方式の変化をまさしく反映したものであり、屈葬四式の中では、彎屈葬・微屈葬がしだいに主となり、本来の典型的な秦人の屈葬形式が崩れて行ったことを示しているのである。

第四期の墓は三基と少ないが、そのうち二基は確実に伸展葬である。また第五期に属する一〇基も、人骨が不明の四基を除いて、あとの六基はすべて伸展葬である。

以上のように、戦国中期から秦帝国時代にかけて、秦人墓制が大きな転換期を迎え、屈葬から伸展葬への移行がここでも認められるのである。

#### ⑥ 陝西西安半坡秦人墓一一二基<sup>⑤</sup>

発掘調査した一一二墓中、副葬品をもっているものは六三基にとどまるが、そのうち、三三基の墓からは合計五七点の陶器が出土しており、それには秦の戦国型陶器である鬲・釜（報告書が甗と呼ぶ）・盂・壺と繭形壺・罐が特徴的に認められ

る。また副葬品として、青銅器では鏡、杖頭、帶鈎、鈴、環、印鑑など三六点、鉄製品では帶鈎や生産用具など二四点を含んでいる。これらの副葬品は戦国中晩期の様相を呈している。

半坡遺跡の埋葬施設は主軸が東西方向、西頭位が中心で該期においても強い伝統を見せている。また木棺槨をもつ長方形竪穴式墓がわずか一基であるのに対して、木棺槨をもつ洞室墓が一〇一基存在し、この墓地の総数の九〇%を占めている。そのよく整った洞室墓の構造から見ると、すでに洞室墓の成熟した段階に入ったことがわかる。この洞室墓構造の画一性と配列の集中性、また前で触れたように銅鏃の射込まれた二基の人骨の存在は、この墓地が戦死者の墓地であることを推定させる。

埋葬方式は、三基が人骨が残らず不明であるほかは、伸展葬が五基、屈葬が一〇四基検出されており、後者が絶対多数を占めている。そのなかには、秦人の屈葬四式はすべて揃っており、中でも抱屈葬と跪屈葬が中心である。出土した副葬品が少ないため、時期区分が困難だが、わずかながら存在している五基の伸展葬に注目する必要がある。そのうちのM9を例として取り上げると、その副葬品は戦国晩期型陶釜・壺及び銅製、鉄製の帶鈎から構成されている。またM89には、銅鏡一点が納められており、それらはいずれも时期的に新しい段階に属することがわかる。また、この五基の伸展葬のうちわけは、二基が西頭位で、三基が北頭位となっており、西頭位優位の形勢が逆転している。半坡遺跡は他遺跡に比べて屈葬、西頭位の原則が強く残存していることが特徴であるが、それでも新しくなると確実にそれらの約束が薄れていくことがわかるのである。

⑦ 陝西宝鸡李家崖秦人墓三六基<sup>⑥</sup>

器種構成は日常生活容器が特徴で、鼎・盒・釜・罐、鬲などすべて秦人陶器の戦国晩期型に属する。また共伴する遺物として銅鏡、銅帶鈎、刀子などがある。これよりこの墓地の年代は戦国晩期と考えられる。

埋葬施設は三六基中、主軸が明確なものは一八基のみで、東西方向と南北方向とが拮抗する。人骨頭位は一八基のうち、

西向きが八基、東向き一基で、また北向き四基、南向き一基、北西向き三基と不統一である。構造は木棺槨をもつ長方形堅穴式墓が五基のみで、あとの三一基はすべて洞室墓となっている。

埋葬方式は三六基中、一四基は人骨が残っておらず不明であるが、そのほかは伸展葬が一基、屈葬が二一基である。秦人の独特な屈葬四式のうち、跪屈葬・穹屈葬を中心として、さらに微屈葬が加わっている。ここでは抱屈葬はすでに見当たらない。

なお、M29からは篆書銅印が発見されている。これは「王盼」という二文字を上下に並べて陰刻した「半印」である。

『十三州志』には、「有秩齋夫、得假半章印」の記載があり、この半印を持つ被葬者は秦国の小官吏であったことがわかる。

⑧ 陝西咸陽黄家溝秦人墓四八基<sup>⑧</sup>

墓地は咸陽原に立地し、秦帝国の都城咸陽の西北に位置する。器種構成はM43の鼎2・壺2の組合せがあり、秦人銅器の戦国型初期に属する。しかし、もっとも多いのは秦人の戦国型陶器の組合せである。とくに鼎・豆・壺・罐（M33のような戦国中期の様式）から鼎・盒・壺・罐（M10・M25のような戦国晩期の様式）への移行過程の組合せをよく示している。また日常生活容器としての罐・壺・釜があり、戦国晩期の特徴である蒜形壺や蒜頭壺及び銅鏡、銅帶鉤、鉄器などがある。これらの遺物の検証により、当墓地の年代は戦国中期のものが数基有り、その他はすべて戦国晩期～秦帝国統一時期に当たると言える。

埋葬施設の、主軸は東西方向が中心であるが、新しくなるにつれ南北方向のものが増える。頭位は西向きを主とするが東向き・北向き・南向きもある。構造は木棺槨を持ち、長方形堅穴式墓が二〇基、横穴式洞室墓が二一基ある。特に、その時期差を考慮すれば、長方形堅穴式墓が徐々に横穴式洞室墓に移り変わっていく傾向が看取される。またすべてに羊・犬などの犠牲獣骨が検出されている。

埋葬方式は、屈葬が二三基なのに対して、伸展葬が二五基とやや多数を占める。この伸展葬は、戦国中期に属するもの

は四基に過ぎないのに対して、戦国晩期に入ると一六基に増加している。そして、戦国末から秦帝国統一時期にかけての六基中、伸展葬は五基と高率を占めている。また、この屈葬四式を分析してみると、抱屈葬は最初からなく、跪屈葬・穹屈葬の比率は時代の経過に伴って減少し、新しくなると全体として微屈葬が多くなる様相が看取される。このように、黄家溝墓地も秦人の墓制の変遷過程をよく物語っている。

#### 4 征服地における秦人の墓制

以上、秦国の中核地域である陝西地区の確実な秦人墓を例に取り、その特徴を考えてきたが、次に遠く離れた地域にありながら、秦人の墓地であることが確実に分かる例を調べてみよう。

##### ① 内蒙古准格爾旗秦人墓一四基<sup>④</sup>

この地は関中地域から陰山、大漠南北とを結ぶ交通の要衝の一つで、副葬品の中に、「(秦の始皇帝)十二年上郡戈」、「広衍」の銘文のある銅矛や「広衍壺」が発見され、それによりそこが秦漢時期の広衍県城の所在地であることが判明した。『史記』「秦本紀」により、戦国(328B.C.)期に秦に帰属してから秦の滅亡までその支配下にあったことがわかる。

ここで調査された一四基の墓葬はⅠ～Ⅲ期に分けられていて、おおよそ戦国晩期～秦帝国期に相当する。

器種構成は戦国晩期の秦人墓に一般的な日常生活容器の銅釜や陶釜・罐・壺などをもち、秦人の中核地域である陝西地区の出土品とよく一致する。

埋葬施設は主軸が東西方向を主とするが、人骨頭位は東向きが多く、北向きが二基で、西向きが一基ある。すべて木棺槨をもつ長方形竈穴式墓で、牛と羊の犠牲が見られる。

埋葬方式は一四基中、伸展葬が四基なのに対して、屈葬が一〇基ある。屈葬形式は秦人独自の四形式がいずれも存在し、例えば、八・M5が抱屈葬で、八・M7が跪屈葬、坵・M2、M4がそれぞれ穹屈葬と微屈葬である。そして、ここでも

やはり屈葬程度が徐々に緩やかになる傾向が指摘できる。なお、この墓地では漢代初期まで徹屈葬が残っている。

② 湖北雲夢睡虎地秦人墓一二基<sup>10)</sup>

雲夢県は戦国晩期から秦の南郡の安陸県に隸属した。睡虎地の墓地は、M7の木槨門上部の横木にある陰刻「秦の昭王五十一年(298B.C.)曲陽士五邦」より年代の一点を押さえられる。また、M2から二点の私信木牘が出土し、M11では一五五点の竹簡文書が発見され、それらは今日もとても重要な秦の史料となっている。たとえばM11から出土した『編年記』から、被葬者の「喜」は、秦の始皇帝三三年(217B.C.)に四六歳で死去、生前には令史類の下級官吏だったことがわかる。

ここでの器種構成は、二通りに分けられる。一つは陶製甕・盃・甗と青銅鼎・甗である。もう一つは陶製甕・盃・甗・鹵形壺・盒と青銅鼎・甗・蒜頭壺・鈔である。この雲夢睡虎地はかつて楚文化の根強い領域に所在したが、以上の副葬品類には、楚文化の伝統礼器——鼎・簋・壺と鼎・敦・壺の組合せがいっさいなく、これとは対照的に陝西地区の秦人墓副葬容器の戦国型と一致していることが明らかである。戦国期の楚地でわざわざ秦の紀年を使っていたことを考え合わせれば、この墓葬のあり方はまさに秦人の直接の移動を示すとして考えられない。

雲夢睡虎地の埋葬施設は、主軸を七基が東西方向に、五基が南北方向に向けている。すべて木槨槨をもつ長方形竪穴式墓で、牛、馬、羊の犠牲が認められる。

埋葬方式は南方地域の自然環境に制限されて、人骨の保存状況がよいものは稀で、計一二基のうち九基は人骨が残っていないかった。あとの三基のうち、伸展葬が二基あるが、徹屈葬が一基(M11、令史の喜)あることが注目される。

5 春秋戦国期の秦の墓制とその移り変わり

ここで、春秋戦国期から秦帝国の統一時代にかけての副葬品以外の秦人の墓制の特徴をまとめてみよう。

まず埋葬主体の主軸は東西南方向にとるのが一貫して主流を占めている。そして、人骨頭位は西向きが中心であった。とくに前期において、西向きは絶対多数を占めている。ところが、それが後期に入ると北向きも現れるようになる。構造は、春秋期には長方形竪穴式墓が中心である。しかし、それは戦国期前後から横穴式洞室墓へ徐々に変わっていく。なお構造の変化に関係なく、木棺槨を持つものが普通で、祭祀用の機能をもつ石圭や羊・犬などの動物犠牲及び殉葬者もある。

そして何より秦人墓の埋葬方式は屈葬がもっとも顕著である。中小型墓だけに限られず、大型墓の殉葬者に至るまで意識的に強く採用されていたもので、秦人中核地域の陝西地区には、春秋戦国期を通じて屈葬の平均比率は八六%前後に達している。とくに陝西長武上孟村・西安半坡における秦人墓では、屈葬の比率はもっとも高く、九三%にも達している。

この所見はこれまでの通説を裏付けるものであるが、ところが、屈葬の比率の変化を分析してみた結果、全体として時期的な変化が認められることが明らかになった。つまり戦国後期以降、秦人墓の屈葬比率は逆に減少の傾向を見せるようになることが判明したのである。代表的な例としては、陝西鳳翔高庄における戦国期の秦人墓で、屈葬の比率が六〇%前後を占めるのに対し、戦国後期から秦統一期にかけての咸陽黄家溝の秦人墓資料になると、屈葬の比率は四七%へ減少している。当然ながらこの動きに反比例して、戦国期以降、伸展葬の比率は徐々に増加していく。例えば、陝西長武上孟村では春秋、戦国の過渡期に属する秦人墓は、伸展葬がわずか七%を占めるにすぎないが、鳳翔高庄にある戦国期の秦人墓では、二二%に達している。また、戦国後期から秦統一時期にかけての咸陽黄家溝の秦人墓においては、伸展葬の比率はさらに五二%にまでも増加しているのである。

そしてこれは屈葬四形式のあり方にも対応していることがわかった。つまり屈葬の四形式は各時期とも認められるが、時期により各々の存在比率は異なり、全体的には、春秋戦国期の前半には抱屈葬・跪屈葬が目だっているが、後半に入ると、屈葬の程度は緩やかになっていくのである。そして秦帝国統一期前後には、屈葬の比率自体が減るとともに穹屈葬・微屈葬が主体となる。



春秋戦国秦時代の五五〇年間、秦人に特有な埋葬思想を反映したものととしての墓制、すなわち西向き頭位及び屈葬の原則などは、その前半にもっとも顕著であったが、春秋から戦国の変革の時代の動きを経て徐々に独自性を弱めて変容していき、ついには、失われていったのである。この独自性の喪失は、副葬品自体の変化と同様、墓制の中原化として捉えることができるのである。

- ① 第一章注⑥、⑦、⑧。  
尚志儒「秦國小型墓的分析与分期」『考古与文物叢刊』第三号、一九八三年一月  
八三年一月  
岡村秀典「秦文化の編年」『古史春秋』第二号、一九八五年八月  
② 北京大学考古教研室「商周考古」文物出版社、一九七九年一月  
③ 陕西省考古研究所、臨潼县文管会「秦東陵第一号陵園勘查記」『考古与文物』一九八七年第四期  
麗山学会「秦東陵探查初議」『考古与文物』一九八七年第四期  
④ 韓偉、焦雨峰「秦都雍城考古發掘研究綜述」『考古与文物』一九八八年第五、六期  
⑤ 陕西省文管会秦墓發掘組「陝西戶县宋村春秋秦墓發掘簡報」『文物』一九七五年第一〇期  
⑥ 尹盛平、張天恩「陝西龍泉邊家莊一号春秋秦墓」『考古与文物』一九八六年第六期  
⑦ 吳鎮烽、尚志儒「陝西鳳翔八旗屯秦國墓葬發掘簡報」『文物資料叢刊』三、文物出版社、一九八〇年  
陝西省雍城考古隊「一九八一年鳳翔八旗屯墓地發掘簡報」『考古与文物』一九八六年第五期（付表三）、一九七六年八旗屯秦國墓葬登記表
- ⑧ 吳鎮烽、尚志儒「陝西鳳翔高庄秦墓發掘簡報」『考古与文物』一九八一年第一期  
⑨ 金學山「西安半坡的戰國墓葬」『考古學報』一九五七年第三期  
⑩ 中国社会科学院考古研究所宝鸡發掘隊「陝西宝鸡福臨堡東周墓葬發掘記」『考古』一九六三年第一〇期  
⑪ 尚志儒、趙滋蒼「陝西鳳翔八旗屯西溝道秦墓發掘簡報」『文博』一九八六年第三期  
⑫ 陕西省考古学研究所「陝西銅川聚廟秦墓發掘簡報」『考古与文物』一九八六年第二期  
⑬ 貞安志「陝西長武上孟村秦國墓葬發掘簡報」『考古与文物』一九八四年第三期  
⑭ 本章注⑧  
⑮ 本章注⑨  
⑯ 何欣雲「宝鸡李家崖秦國墓葬清理簡報」『文博』一九八六年第四期  
⑰ 秦都咸陽考古隊「咸陽市黃家溝戰國墓葬發掘簡報」『考古与文物』一九八二年第六期  
⑱ 崔浩「秦漢広衍故城及其附近的墓葬」『文物』一九七七年第五期  
⑲ 第一章注⑥

### 三 秦人墓制の起源

『史記』「秦本紀」によれば、秦人は紀元前八四一年に初めて明確な紀年があり、これ以前には断片的な記載しかない。秦人早期の活動地域に関するものとして「或在中国、或在夷狄」とあるが、人名や族名などは曖昧模糊としている。このため、一九四〇年代以来、歴史学界では秦の起源について、論争が続いている。それには大きく分けて「東來說」と「西來說」<sup>①</sup>とがある。

これまで分析したように、春秋戦国期の最も著しい特徴をもっている秦人墓制は、特にその前半期即ち春秋期にはずではっきりとした特徴を示している。したがって、この墓制を更に遡って探究することは秦文化或いは秦人自身の起源問題をみいだす重要な手がかりとなろう。以下私はこの起源問題について考えてみたい。

#### 1 西周期における秦人墓の検討（甘谷毛家坪A組墓葬三二基）

一九八二年と一九八三年到北京大学考古学系と甘肅省文物工作隊が、甘肅東部天水地区甘谷毛家坪・天水董家坪にある西周～春秋戦国期の遺跡調査を行ったところ、その地の陶器の器種構成や型式の組合せなどがそれ以前の在地の文化要素と全く違っており、陝西地域の様相を強くもった文化であることが判明した<sup>②</sup>。

報告書によると、董家坪遺跡の層序は攪乱がひどかったが、毛家坪A組遺跡の住居址と墓地の層序は整然としており、各時期の墓と住居址がみつかっている。その文化様相は大きく前・後二段階に分けられる。前半期（Ⅰ・Ⅱ期）は西周時期に、後半期（Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ期）は春秋戦国期にあたる<sup>③</sup>。

この毛家坪A組遺跡の埋葬施設は、主軸を東西方向に向け、人骨頭位は西向きを主とし、まれに西北向きがある。いずれも木棺槨をもつ長方形竪穴式墓で、羊・犬類の祭祀犠牲を伴っている。

埋葬方式は一基の乱骨葬(二次葬?)を除き、あとの三一基は、全て屈葬になっている。そのうち抱屈葬、跪屈葬が二五基で、彎屈葬は少なく六基しか存在しない。この屈葬形式は春秋戦国期陝西地区における秦人墓の形に全く一致する。また羊・犬の犠牲及び多数の石圭を棺の上に納める風習も陝西地区秦人墓の特徴によく符合する。以上のように、埋葬施設・屈葬形式及び人骨頭位の西向き規制は秦人墓の条件を完全に満たすものとなっている。

ところで、甘谷毛家坪遺跡では層位的な発掘の結果、五期の文化様相に対応した陶器編年(第一期～第五期)が組み立てられている。図5のように、第二期～第五期の主要器種である鬲・盆・豆・罐は該当時期の陝西地域秦人墓のそれと、基本的に一致する。陝西地区からは遠く離れた地域でありながら、春秋戦国期に並行する第三期～第五期に見せる陝西地区との墓制と陶器の一致は、両地域の文化の同質性を示すものである。すなわち春秋戦国期に並行する甘肅甘谷毛家坪A組遺跡の第三期～第五期は秦文化と言っても全く差し支えないのである。

ところが、甘肅甘谷毛家坪A組遺跡の営まれた全期間、つまり第一期～第五期は、層位的、そして文化的な継続性から同一の文化系列であることが明らかとなっている<sup>④</sup>。それゆえ、第三期～第五期の文化様式が秦文化に属するということは、それに先行する第一期～第二期の文化こそ秦文化の祖形であると結論付けることができるのである(図5のI、II期の鬲、罐)。では、この西周期に相当する第一期～第二期の墓制は一体どのような性質をもっているのか時期を限って調べてみよう。この時期に属するものは一二基あり、すべて抱屈葬・跪屈葬に属する。そして西頭位の規制や石圭の副葬までもがそこに認められる。これは、すでに前章で分析したように、まさしく秦人墓制の要素と言える。

また副葬陶器の器種構成から検討してみると、毛家坪A組の典型的な組合せは鬲・盆・豆・罐であるが、長安豊西にある並行期の西周墓では、多くは鬲・簋・罐と大きく異なる。ときには鬲・盆・豆・罐の組合せも見えるけれども、製作技法は大きく違っている。つまり、毛家坪A組の陶器様式は西周文化の要素に似ている点も多少はもっているが、むしろその文化は春秋戦国期の秦文化の直接の祖形であることを示しているのである。毛家坪遺跡の西周時期の秦文化の年代は西

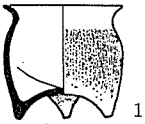
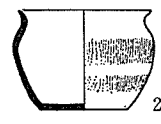
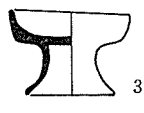

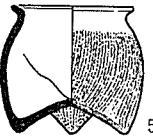
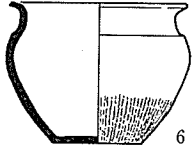
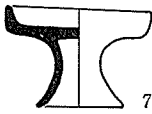

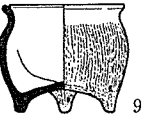
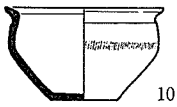
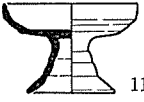



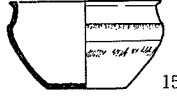
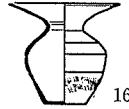
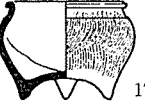
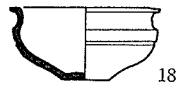
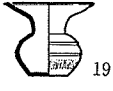
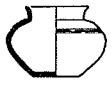
	鬲	盆	豆	広口罐	短頸罐	出土墓葬
I	 1	 2	 3		 4	1 M6 2~4 M1
II	 5	 6	 7	 8		5 TM5 6・8 M9 7 M3
III	 9	 10	 11	 12	 13	9 M11 10 M14 11~13 M12
IV	 14	 15		 16		14~16 M5
V	 17	 18		 19	 20	17~19 M17 20 M18

図5 甘谷毛家坪A組遺跡の陶器の編年（広口罐のみ1/8、ほかは1/4）

周時代の早期に遡るであろう。

文献中、秦人の祖先が周王室に奉仕する記載が頻出する。例えば、「造父善御、幸於周穆王」、「非子為孝王主馬於汧渭之間」とあり、また秦の庄公が戎を征伐して功勞を得て、「西垂大夫」に封ぜられるなど、当時の秦は周王室に服属した小国で、「在西戎、保西垂」の役割を果していたから、秦文化が周文化の影響を受けたのは不思議ではない。このことから周秦文化の混在現象が理解できる。そして『史記』「秦本紀」により、西周時代の秦人の活動の中心は「西犬丘」と「秦」とされる。王国維、郭沫若の考証によると、「西犬丘」は今の甘肅天水地区の西和県、礼県のあたりに比定される。そして「秦」地についても『史記』「秦本紀」の斐姻『集解』が徐広の解釈を引き、「今天水隴西県秦亭也」としている。先の考古学的な検討結果はこれらの文献史料を裏付けるものであり、この時期に秦人が甘肅東部に活躍していたことはほぼ間違いない。

また西周末期、諸戎は陝西西北地域に侵入し、そのうち、犬戎と申戎は西周の都を陥しいれ、周幽王を陝西臨潼驪山に殺害したという。当時、秦は「(秦の)襄公將兵救周、戰甚力、有功。(翌年、周王朝東徙洛邑)襄公以兵送周平王。平王封襄公為諸侯、賜之岐以西之地(現在の陝西岐山県の東北にあたる)」とある。つまり秦人は西周末の動乱時期に、「將兵救周」を契機として諸侯となった。春秋時代に入ると、秦人は周文明の発生地である汧渭の間に進出する一方、恵まれた自然環境を利用し(発見された鉄製の農具も多数であり、農業生産力の大きさを窺うことができる)、先進の周王朝の文化を継承することにより、国力を急速に強大化していったと考えられるのである。

では、この秦人の存在はどこまで遡って確認できるであろうか。毛家坪遺跡の状況から判断すると、少なくとも商代末期頃には、秦人は既に甘肅東部(つまり中原に対して西方の地)あたりで活動していたことが推定できる。今後、甘肅東部地域をもっとも注目していきたい。

## 2 中国における屈葬習俗圏(図6上段)

埋葬方式と副葬品とは宗教的な習俗や制度上の慣習から死者に地中まで持ち込ませたものである。秦人墓制のもっとも大きな特徴としての屈葬の埋葬方式は中国歴史上において非常に特殊なものであり、春秋戦国期では一時的に広がるけれども、殷周時代以前の墓葬資料を調べてみると、その分布地域は甘肅東南部及び青海東部あたりに限られていることが知られる。

今まで発表された報告の中では、最も古い屈葬資料は甘肅地区を中心とした新石器時代の馬家窯文化の半山(2650~2330 B.C.)期に遡る。すなわち馬家窯文化の半山期・馬廠期(2650~2050 B.C.)に属する甘肅広河地巴坪墓地<sup>⑥</sup>や蘭州七里河区花寨子墓地などで発掘された資料が、中国全土において最古のタイプであると言える。それらを秦人の屈葬形式と比べてみると、抱屈葬・跪屈葬の形が酷似していることがわかる。

この後、同じ地域の齐家文化(2050~1600 B.C.)の墓地では、総数の大半を占める単人墓はほとんどが伸展葬で、屈葬がわずか(22%)になるといふ変化を見せる。またここでは合葬墓の存在が特徴的で、男性が伸展葬で、女性が男性に向けて屈葬姿勢をとっている。屈葬の比率は少ないが、存在形式として相変わらず抱屈葬、跪屈葬、彎屈葬がそろっている。<sup>⑦</sup>

次の辛店文化(1600~950 B.C.)の埋葬方式は、甘肅永靖蓮花台の辛店文化に典型的なように、齐家文化の特徴を色濃く残しており、埋葬方式も伸展葬を主とする。ただし、屈葬・二次葬もある。

つまり、黄河上流域に位置する甘青地区では、新石器時代より西周時代に至るまでの約一七〇〇年間、屈葬という特殊な墓制は廃れることもなく続いてきたのである。ここに、ひとつの屈葬習俗圏を認めることができよう。特に、屈葬四式のうち、最も典型的なものである抱屈葬と跪屈葬は新石器時代から春秋戦国期の秦にかけて一貫して存在していた。この屈葬習俗圏におけるさまざまな文化の交流と伝播の中に、毛家坪A組以前(殷周以前)の秦人墓制の起源を更に追究する手がかりが求められるであろう。

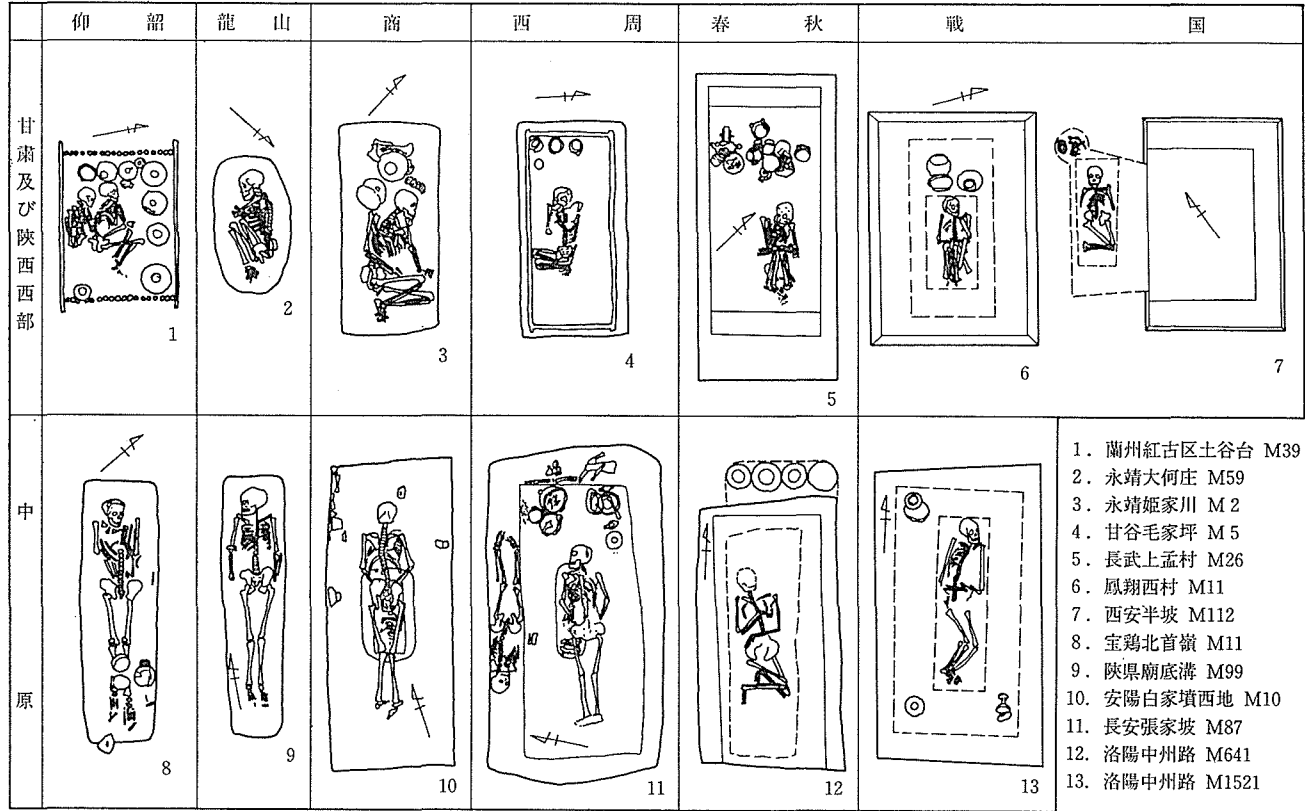


図6 甘肅及び陝西西部地域と中原地域の墓制比較 (縮尺2・3・8—10・12:1/30 1・4—6・11・13:1/40 7:1/60)

① はじめの「西來說」の代表的な学者は蒙文通氏で、秦人が西戎に起源すると説いた(『秦為戎族考』『禹貢』第六卷七期、一九三六年)。これに対して、徐旭生氏は『中国古史の伝説時代』一九四三年(一九八五年増補改訂、文物出版社)で、秦の祖先は東夷民族であるとすると「東來說」を唱えた。その他、翦伯贊氏は『秦漢史』一九四六年(一九八四年改訂、北京大学出版社)の中で、秦人は東遷諸羌の一つであると指摘した。近年には、顧頡剛氏の「秦は本来東夷族であり、周公の東征の時に西遷させられた。」という「東來說」(『從古籍中探索我国的西部民族』『社会科学戰線』一九八〇年一期)と、俞偉超氏を中心とする西來說(『先秦兩漢考古學論集』文物出版社、一九八五年)の両説が対立している。

② 甘肅省文物工作隊、北京大学考古学系「甘肅甘谷毛家坪遗址発掘報告」『考古学報』一九八七年第三期

③ 趙化成「甘肅東部秦和羌戎文化的考古学探索」『考古類型学的理論与实践』俞偉超主編、文物出版社、一九八九年五月

④ 本章注②、③

⑤ 王国維「秦都邑考」『觀堂集林』中華書局、一九五九年

⑥ 郭沫若『两周金文辞大系図録考釋』科学出版社、一九八五年

#### 四 秦人の移動に伴う中原地域の墓制の変化

##### 1 中原地域の在来墓制(図6下段)

秦の西來をより確実なものとするためには、移動先の中原地域における在来墓制の特色を明らかにし、秦人の移動に伴ってそこにどのような変化が認められるかどうかを検討してみることが必要である。ここで、中原地域における在来墓制

⑥ 甘肅省博物館文物工作隊「広河地巴坪「半山期」墓地」『考古学報』一九七八年第二期

⑦ 甘肅省博物館等「蘭州花寨子「半山類型」墓葬」『考古学報』一九八〇年第二期

甘肅省博物館、蘭州市文化館「蘭州土谷台半山—馬廠文化墓地」『考古学報』一九八三年第二期

⑧ 齊家文化は馬家窯文化の後、甘肅東部の黃河流域に広がった新石器時代末期、あるいは階級社会の萌芽期の地域的文化と認められている。

⑨ 甘肅省博物館「甘肅武威皇娘々台遗址発掘報告」『考古学報』一九六〇年第二期

中国科学院考古研究所「甘肅永靖秦魏家齊家文化墓地」『考古学報』一九七五年第二期

⑩ 辛店文化は齊家文化の後、甘肅東南部と青海東部の洮河、大夏河と湟水の中、下流域に分布する青銅冶金技術をもつ地域文化である。

⑪ 中国社会科学院考古研究所甘肅工作隊「甘肅永靖大河庄遗址発掘報告」『考古学報』一九七四年第二期

中国社会科学院考古研究所甘肅工作隊「甘肅永靖張家嘴与姬家川遗址的発掘」『考古学報』一九八〇年第二期



を新石器時代に遡って調べてみたい。

中原地域の新石器時代（5000～3000 B. C.）は仰韶文化と龍山文化期とに分けられる。まず、仰韶文化期の陝西宝鸡北首嶺墓地①四五一基を例にとろう。主軸は全体として北西方向が重視され、人骨頭位は北西向きを中心とする。長方形堅穴式墓が三八五基で、小児用甕棺が六六基ある。埋葬方式は九〇基が人骨が残らず不明であったが、伸展葬は三五九基で、絶対的多数を占める。また屈葬らしいものは二基あるが、その一基は甕棺の中に入れられた成人骨であり、二次葬に属する。もう一基は微屈葬の範疇に入るけれども、これも、意識的なものではなからう。

北首嶺の所在するこの地域は、のちに秦の領域に属することになるが、新石器時代においてはほとんど伸展葬であり、頭位が西向きになっていないことなどは仰韶文化の墓制全体に共通して指摘できることである。

龍山文化は仰韶文化に続く文化で、河南洛陽廟底溝墓地②一四五基を例として見ると、主軸は南北、人骨頭位は南向きが主で、北向きが若干加わる。すべて長方形堅穴式墓で、そのうち人骨が不明の五基を除くと、一三八基の伸展葬が総数の九五%を占めている。また微屈葬は二基あるが、それも胴と足の屈曲度は一五〇度～一六〇度で、例外的なものとみなせよう。

商代においては、河南安陽殷墟墓地③三〇二基が好例である。この時期は先の毛家坪遺跡A組の形成期に相当する。主軸は南北方向を向き、まさしく「北首」の北頭位の規制が画一的に認められる。木棺槨をもつ長方形堅穴式墓で、殉人や犬、豚、牛の犠牲が見られる。埋葬方式としては九四基が人骨が残らず状況不明で、その他は伸展葬が二〇一基を占め、絶対的優位を示している。また微屈葬も六基あったが、それも、意識的に屈葬したものではないと思われる。

また西周墓制の代表例として陝西長安張家坡西周墓地④一二四基があげられる。主軸は南北方向を中心として、頭位は北向きが主である。長方形堅穴式墓で、多くは木棺を持つが、少数が席で遺体を覆う形式のものである。全体の三分の一の墓壇の底には腰坑があり、また犬の犠牲の風習も認められる。三七基が人骨が残らず不明であったが、これを除くと八六

表2 長安豊西・洛陽中州路・鄭州二里崗遺跡における屈葬と伸展葬の存在数と比率  
(括弧内は%, 不明のものは省略してある。)

	豊西			中州路			二里崗		
	屈葬	伸展葬	総数	屈葬	伸展葬	総数	屈葬	伸展葬	総数
商	—————			—————			0	3 (100)	3
西周	0	109 (59.9)	182	0	8 (80)	10	—————		
春秋戦国	60 (84.5)	5 (0.07)	71	215 (82.7)	30 (11.5)	260	48 (22.6)	159 (75.0)	212

墓が伸展葬で、屈葬はただの一基しかない。その唯一の屈葬例は女性であり、外族の入婚者と考えることも可能である。

## 2 在来墓制の変化

以上のように、中原地域は新石器時代から西周時代まで一貫して北頭位が目だっており、伸展葬が続いていたのである。それが、春秋戦国期を迎えると一大変化を来す。それを中原地域における春秋戦国期の次の代表的な三遺跡を例に挙げて調べてみよう。ここに取り上げる鄭州二里崗<sup>⑥</sup>(商の王都所在地)と陝西長安豊西墓地<sup>⑦</sup>(西周の「豊鎬京」所在地)、洛陽中州路墓地<sup>⑧</sup>(周王朝の東遷後の王都領地)の三遺跡は、いずれも同一遺跡内に春秋戦国期の墓地とともに、それに先立つ時期の墓地を併せ持っていることから、地域の墓制の変遷を検討する好例と言える。表2は、かつて商周時代の王都所在地であったそれぞれの墓地で、この時期に伝統的な埋葬方式が急速に屈葬に取って代わられたことを物語っている。数千年間続いてきた伝統的な伸展葬が屈葬に取って代わられ、その比率は八四・五%(長安豊西墓地)に達したのである。また、埋葬施設の主軸についても、一時的に南北方向の優位性は崩れ、人骨頭位も北向きの約束が乱れている。

これは、まさしくこの時期に、特有の墓制を持った秦人が西から移動してきたことを裏付けている。では、これらの中原地域の墓の被葬者自身が移動してきた秦人であった可能性はないのであろうか。

それには屈葬四式の比較が参考になる。なぜなら、前章で検討した秦の勢力圏である陝

西地域と、周王朝を取り巻く中原およびその周辺地域の屈葬の各形式の存在比率には相違が認められるからである。即ち中原地域では抱屈葬は極めてまれで、跪屈葬・弯屈葬が大多数を占め、陝西地域と比べて屈葬の程度は明らかに弱いのである。

これは、春秋型の副葬品を受け入れることがなかったということとも対応し、この地域の中原文化の伝統の強さを物語っている。よって、この墓制の変化は征服に伴う直接の秦人の到来を示すのではなく、秦人の東遷に伴う強力な秦文化の波及が引き起こした大きな社会変化の結果とみなせよう。

こうした影響は、これまでの資料の増加によって、河南の三門峡、鄭州崗杜・山西の侯馬、榆次・湖北の雲夢睡虎地、江陵鳳凰山・四川の成都羊子山・広東の廣州淘金坑、広西壮族自治區灌陽遺跡などでも確認され、秦人の文化が華中・華北・華南の各地域へ広く分布していったことが判明している。

- ① 中国社会科学院考古研究所編『宝鸡北首嶺』文物出版社、一九八三年一月
- ② 中国社会科学院考古研究所編『廟底溝与三里橋』科学出版社、一九九九年九月
- ③ 中国社会科学院考古研究所『殷墟発掘報告』文物出版社、一九八七年十一月
- ④ 発掘調査により、商・周時代の墓制のあり方は正しく『禮記』「檀弓」の「葬於北方北首、三代之葬礼也（葬地が聚落の北にあり、また頭を北にして葬ったのは夏商周三代統一された正礼である）」という
- ⑤ 記載に合致していることが判明している。第2章注②文献参照。  
中国社会科学院考古研究所遺西発掘隊二一九六七年長安張家坡西周墓葬的發掘』『考古學報』一九八〇年第四期
- ⑥ 河南省文化局文物工作队『鄭州二里岡』科学出版社、一九五九年八月
- ⑦ 中国社会科学院考古研究所『滎西発掘報告』文物出版社、一九六三年三月
- ⑧ 中国社会科学院考古研究所『洛陽中州路』（西工段）文物出版社、一九五九年一月

## 五 五 五 五 五

秦人の墓制は中原地域の墓制とは際違った対照を見せるものである。それは、墓制の諸側面、すなわち倣銅陶器の様式

を始めとする副葬品、西向き頭位の原則、そして屈葬の圧倒的な強さであった。現段階ではこの墓制の起源は甘肅東部地域の西周並行期の文化にまで遡ることができる。秦人の墓制は甘肅東部地域を基盤とする文化集団の伝統的な墓制から生まれてきたものであり、秦人の起源はこの西方の地域に求められるのである。

そして、中原地域に一時的に認められた秦人の特徴的な墓制の広がりは、まさしく春秋戦国期に秦が西方から移動してきた波を受けたものであった。

ところが、その後一つの注目される現象が指摘されたのである。すなわち、いったん強い影響力を周囲に与えた秦人特有の墓制は、天下統一へ向かう戦国後期から秦代にかけて、むしろ急速に弱まっていき、ついには失われてしまったのである。国の発展期におけるこの現象は、独自の文化の衰退、「征服者は文化的に征服される」などと消極的に評価されるべきではない。むしろ、次のように解すべきであろう。

副葬品の検討の際にも認められたように、この屈葬を始めとする伝統的墓制の放棄には、秦人の意欲的な中原文化撰取の態度が読み取れるのである。もともと、中原諸国の西方の一小国から出発した秦が統一帝国を築き上げていく過程は、一貫して中原文化に同化する諸段階であったとも言えるのではなからうか。つまり、大型墓、中型墓に早くから認められた中原文化の志向が、戦国期から統一期にかけて、ついには下層階級の墓制にいたる全ての墓制に貫徹されたと見ることができるのである。これは始皇帝が度量衡の統一を進めたことなどにも一脈通じるものであり、そこに一元化を目指す政治的意図さえ読み取れることもできるように思われる。

〔謝辞〕 本稿が成るまでに、高橋克壽氏から御教示をいただき、磯野浩光、高橋照彦、高橋美久二、森下章司、菱田哲郎、吉本道雅の各氏から適切な助言を賜りました。京都大学考古学研究室の諸先生、諸兄姉には、日頃より多大なる恩恵を得ています。紙面を拝借して、心より御礼申し上げます。

'solidarism' and 'reformatory policy'. And they tried to put their policies and their coalition government plan into practice in the double political maneuvering for the formation of the coalition government with the Social Democratic Party undertaken by the *Yoshida* cabinet. Thus they took the opportunity provided by the labor offensive and paved the way for the formation of the coalition government with the Social Democratic Party. This movement implies historically that the revolutionary upsurge during the period of the General Strike of February 1 made a 'reformatory' conservative force appear on the postwar political stage in Japan, able to form a coalition government with a social democratic party.

## Burials of Chin and their Origin

by

HUANG Xiao-Fen

It has become fairly clear that the Chin (秦), the first dynasty of ancient China, had a grand culture with great capital city sites and royal tombs. But we hardly know anything of the origin of the Chin culture and people, their development, and their eclipse. In this paper I considered this problem using archaeological materials from burials.

First I examined burials of the Chin in Chunqiu (春秋) and Zhanguo (戰國) periods focussing mainly on burial objects, rankings of the burial size and structure, and the form of burial-particularly contracted burials. I found Chin burials were most unique during the Chuqiu period, when almost all of the dead body was more strongly contracted and styles of grave goods were different from those of Zhongyuan (中原) culture. But in the Zhanguo period this gradually faded out and the form of burial became homogeneous with that of Zhongyuan Culture.

Then I showed that the form of Chin burial had originated in Gansu (甘肅) district, in west China, where contracted burial had emerged long before it did in Zhongyuan district. The lower culture of the Maojiaping (毛家坪) site can be said to be direct prototype of the Chin, dating from as early as the Western Zhou (西周) period. In contrast, in Zhongyuan

district, extended burial had been traditionally adopted until the Xizhou period, but it was superseded by contracted burial in the Chunqiu Zhanquo period. I consider that this phenomenon could have been brought about by Chin people moving to the east at that time. On the other hand, the loss of originality in burials could be regarded as an indispensable process in the construction of a great Chinese dynasty.